

影なる王女



第二章

ヤマトの北限は、王宮より北へ川をさかのぼった、志賀の淡海にある。

年に一度、春になると息長皇后は、王族や群臣を従え、難波の津より舟で川を遡り、志賀の淡海に出向く。巨大な湖の岸べりに、桜を愛でつつ宴を開き、山に登って国見をする。頂の向こうにははるか山地が広がり、それを越えれば且波の国である。

先の大王の御代、大王は兵を遣わし、且波の王を殺した。しかし未だ且波はヤマトの大家に從わない。

息長皇后の国見は、できうるかぎり華やかに彩られ、その威勢は山人たちの耳から耳へ伝えられ、やがて且波の地にも届こう。且波が山を越えてヤマトに侵掠することを牽制する意味もあった。

その日、緑の鬱蒼たる比叡の山を背に、淡海の湖岸には、百を越える色鮮やかな衣を飾った群臣や宮女が、楽の音に乗って、暖かな日差しの下、宴を楽しんでいた。

湖岸に住む民を、安曇と呼ぶ。安曇は舟を操り、鮎や氷魚、海老等の魚を採る。

王宮に住まう王族、あるいは王宮に仕える豪族を、宮処人と呼ぶ。訪れた宮処人を饗応するは、王地の僻遠に住まう里人にとっても晴れやかな喜びとされていた。

宴の中央に、絹を張った傘が据えられ、筵の上に座す息長皇后の御前に、安曇の長が一族を引き連れ川魚を運び、うやうやしく跪いて献上する。皇后はにこやかな笑みをつくり、火で焼いた魚を口にし、「美まし」と声をかける。安曇どもは喜び立ち上がり、鄙の舞いを踊る。

稚建皇子は、ひとり人々の群を離れ、湖岸のさざ波に足を濡らし、細い透明の稚魚が、その足首を避けるように泳ぐのを見つめていた。

「皇子」

振り返れば、春日郎女がにこやかに立っていた。

「皇子はいつも、独りでおわすことを好む」

皇子は恥ずかしげに笑い、俯く。郎女は、皇子に肩を寄せるように、自らも足を水に浸した。

「比叡の山に、滝が流れるところがあると聞いた。山人は時に滝に打たれ、己が霊を浄めるといふ」

春日郎女は、誘うように皇子の貌を覗き込んだ。

「皇子は、滝を見たくはないか」

皇子は貌をあげて郎女を見た。眼が、萌えるように輝き、唇が意味ありげな笑みを作つて皇子を誘っていた。

稚建皇子は、春日郎女に手を引かれるようにして、宴の場を離れ、山道を登った。安曇の里人がひとり、腰を低くかがめつつ先導した。

やがて道は狭く勾配が急になり、ときに日の光は、左右から迫り来る樹海に遮られた。生い茂る草むらが、行く手を阻んだ。安曇の里人は、山刀を振るい、道を開いた。

「この山は、なんの神を祀るか、皇子は知るや」

郎女が、息をはずませ、皇子に手を引かれながら問うた。その背中が、少したくましくなったように彼女の眼に映った。寝屋においては郎女の手の内にある皇子は、山道では男らしく、彼女の手を引いて、強い足音で土を踏みしめている。

「知らぬ。郎女は知るや」

「吾も知らぬ」

郎女は、喉を鳴らして笑った。

太古において、山は麓の民が崇める神が祀られる聖地であった、山奥の滝や巖に、そうした神が宿る。

「吾が同伴の神にはかなうまい。まして、女神の末裔たる皇子にとって、安曇の国津神など下部のようなもの」

不意に、郎女は皇子の背を抱いた。皇子が足を止めたとき、彼女の手が皇子の股間にのび、ふぐり玉を軽くひねりあげた。皇子は、喉の奥で呻き、眼を閉じ、背をわずかに反らせた。

「比叡の山の神に吾等を守護し奉らせ、快を尽くそう」

稚建皇子は、その言葉にびくりと身を震わせ、眼を見開いた。郎女の指が動き、さらに皇子のふぐり玉を痛めつけた。皇子は大きくうめいた。

安曇の里人は、こちらを振り返ることもなく、じつと背後の宮処人がふたたび歩みはじめるのを待っている。

郎女の手が皇子の股間を離れた。郎女は、皇子の額の汗を舐め、皇子の手を取り、大股に歩き始めた。

不意に視界が開け、切り立った崖が岩肌を露出させ、轟々と音をたてて水が頂きより流れ落ち、滝壺から水煙が吹きあがっていた。

安曇の里人は、滝壺を要に扇形に広がる水辺にひざまず跪き、額を地につけ伏し拝んだ。

これが安曇の神……

水煙と轟音が醸し出す聖なる気に打たれていた皇子の耳に、春日郎女の声が、絹を裂くように飛び込んできた。

「汝は帰れ」

雷に打たれたように安曇の里人は立ち上がり、一瞬、郎女を凝視し、跪いて一礼し、身を屈めるようにして皇子と郎女の傍らをすり抜け、元来た道を引き返しはじめた。

「暗くならぬうちに、迎えに参れ」

たかだかとした郎女の声に、安曇の里人はこちらを見ぬまま、体を強張らせて首をすくめ、走り去った。

「皇子」

里人が消え去るのを見つめていた春日郎女が、皇子に向き直った。大きな瞳が、潤んで揺れていた。

「吾等は宮処人。はばかりことなく快をむさぼるは、宮処人のみ仕得ること」

郎女は両手を皇子の首に回し、膝を突き上げた。

皇子は身を反らせ、膝が震えた。崩れ落ちようとする皇子を、郎女は両脇に手を添えて支えた。

「皇子よ、国津神の前で快を味わうは、忌むべきこと。なれど、忌み事を破るに勝る快はない」

郎女の膝が、ふたたび皇子のふぐり玉を打った。皇子は悲鳴をあげ、眼から涙をこぼし、腰を落とした。郎女はすかさず、膝を皇子の股間に入れた。

「日継の皇子よ、何を恐れ畏まることやある。やがてこの天地を統べるは、皇子ぞ」

郎女は、激しく身を震わせ、筋を堅くして崩れ落ちまいとする皇子の足下に膝をつき、帯を解き、下半身をさらした。

堅く屹立した皇子の陽物を握りしめ、郎女はふぐり玉を指で弾いた。掌のなかで、熱く

血の滾る肉の棒に、郎女は唇を寄せた。

皇子は、いつものように恍惚と眼を閉じ、郎女の唇と舌がもたらす快に身をゆだねた。ときにふぐり玉を指で弾かれ、その都度、快は弥増した。

「郎女」

皇子は、荒い息の下から声を振り絞り、蛇のように動く郎女の頭を両手で抱えた。

「まことに吾は、日継の皇子か」

「然り」

郎女は一瞬、陽物から唇を放して答え、再び唇に含み頭を動かした。

「ひよわな皇子も、いずれ猛き大王となりうるや」

「然り」

否。

たしかに「否」と響いた。

滝の水音をかきわけ、しわがれた声が、皇子と郎女の耳を打った。

郎女は声のした方に振り向き、すばやく眼を動かした。

皇子は眼を開け、頼りなげに首を動かした。

あああああ！

再びしわがれた声が、山中に木霊した。

「誰ぞ！」

郎女が立ち上がり、拳を握りしめて叫んだ。

「吾等は宮処人。吾は大伴金村が娘、春日郎女。彼は、息長皇后の日継の皇子、稚建皇子。出で来よ、妖かしの者」

郎女は、裂けるばかりに眼を見開き、膝を曲げ、拳を握りしめて叫んだ。

あああああ！

声の主は、水辺に座っていた。

女だった。

腰まで届く白髪を垂らし、獣皮の衣をまとい、俯いて皇子や郎女から眼をそらしていた。眼を閉じ、ただ口を開けて、呻くように吼えている。

あああああ。

「誰ぞ！」

郎女は、地面の石を蹴って、女に駆け寄った。

女は、ゆつくりと貌をあげた。

「名は！」

郎女は、右手を伸ばして白髪をつかみ、ゆすぶった。

女の両手が、郎女の右腕に伸びた。

郎女は、己が右腕に視線を落とし、はっと後ずさった。

女の腕は、手首から先がなかった。

女は、水辺の石に腰掛けたまま、眼を閉じたまま、手首のない両腕を伸ばし、あああとしわがれた声を発している。

「汝は、眼が見えぬか」

肩を上下に震わせながら、春日郎女は弾む息とともに問うた。

女は、深くうなずいた。

「ものも言えぬか」

女は、深くうなずいた。

「耳は聞こえるか」

女はうなずき、郎女を見上げて、唇を歪めて笑い、立ち上がった。貌をこちらに向け、すっと背筋を伸ばしたさまは、髪の色に似つかわしくなく、しなやかな四肢が日の光をいっばいにあびた向日葵ひまわりのように、しっかりと大地を踏みしめている。

かすかな笑みを浮かべた女の貌に、郎女はまたも後ずさった。

「皇子」

郎女は叫んだ。返事はなかった。

「皇子！」

郎女は、身を曲げて背後を振り返った。

稚建皇子は、両手で股間を押さえ、下肢を外向きに曲げ、尻を地面についている。口が

半ば開き、視線はひたすらに、白髪の子を見つめている。

「汝は何者なるか」

郎女は、意を決したように向き直り、負けじと背筋を伸ばして問うた。

女は膝をつき、両手を伸ばして地を探った。その手首に、落ちた木の枝が触れた。女は掌のない両腕で枝を抱え込み、先端を地面に置いて動かした。

彼女の膝の真下に、文字が書かれた。春日郎女は、視線を落として文字を読んだ。

汝はまことに、息長皇后の皇子なりや……。

「然り、日継の皇子」

郎女が声を励ますと、女はけたたましく、口をいっぱいに開いて、哄笑した。

「汝、いづれ大王の御位に即く皇子を笑うか」

郎女が、右腕を背後に回し、反動をつけて女の頬に掌を打ち付けた。

女の軀が一瞬強張り、切れた唇から血が滴った。袖で血を拭い、再び地面に枝でなにやら書き付けた。

春日郎女は息を呑んだ。

「郎女」

皇子がおずおずと声をかけた。

「その者、何を書いた？」

郎女は答えなかった。皇子は弾かれたように駆け寄り、地面に書かれた文字に見入った。
稚建皇子 非息長皇后之子。

稚建皇子は息長皇后の子にあらず……。

「皇子！」

春日郎女は、氷のように棒立ちになった皇子の肩をつかんで揺すぶった。

「山の狂女の迷い言である」

皇子は答えなかった。

女は、あざけるように笑い、またも地面に文字を書いた。

皇后無産子。

皇后は子を産みたること無し。

「ならば！」

郎女が声を張り上げた。

「皇子が母は誰ぞ！」

吾田媛。

「あだひめ……」

郎女は呻いた。

「郎女！」

皇子は叫んだ。

「吾田媛とは誰ぞ！」

「吾は知らぬ！」

貌を赤くして叫ぶ郎女に、皇子は口をつぐんだ。

再び静寂が訪れ、ただ滝の音のみが響いていた。

二人が貌をあげ、周囲を見渡したとき、すでに白髪の女の姿はなかった。

そして、女が地面に書いた文字の連なりに、こう添えられていた。

吾田媛産 稚建皇子 影皇女

「日継の皇子よ」

湖の西のかたに、日が沈もうとしていた。

酒に潰れた諸臣を下部どもが輿に載せて運び、安曇の里人が、宮処人が食い散らかした

宴のあとを片づけていた。

慌ただしいなか、ひとり息長皇后はゆったりと湖岸に座し、八須女、香和女、葉津女ら

三人の宮女を傍らに従え、眼前に跪く稚建皇子に微笑みを向けた。

「宴のさなか、いづくにいましたのか」

「比叡の滝に」

「滝……。何故に滝に」

皇后の眼がややきつく細められた。

「御身独りですか」

稚建皇子は俯き、答えることができなかった。

「ぜひ明日、滝に国見なされ」

皇后が眼をあげると、皇子の背後より春日郎女が歩み寄ってきた。

「安曇のものども、比叡の山中の滝を、神として崇めると聞いた。どのような滝か、見たかった。皇子が、ともにまず見ようと言われた。安曇の者を案内に、皇子と吾とで滝を見た。美まし滝であった。皇后が滝にすれば、比叡の神は大王家に服す」

春日郎女の朗らかな笑みを、皇后はまばたきすることなく見つめていたが、やがて立ち上がった。

「春日郎女、汝は聡い」

宮女の八須女が背後を振り返り、合図した。壮丁たちが輿を肩に載せて近づいてきた。

「汝ならば、日継の皇子も心安らかであろう」

春日郎女は、感謝の意を、さっと顔を地面につけて表した。息長皇后は、侮蔑ではなく警戒の眼差しを一瞬つくって郎女を見下ろし、輿のつて去った。

次の日の夜。

稚建皇子は、安曇の長の邸の寝屋に、ひとり膝を抱えていた。

邸は、百を越える宮処人に明け渡され、長とその家族は、いずくかに移っていた。邸の

周囲はあかあかと夜じゅう消えることのない篝火と、寝ずに番をする武装した安曇の若者たちに囲まれていた。

稚建皇子は、身じろぎもせず、滝で出会った白髪の女が地面に書いた文字を、脳裏に反芻していた。

吾田媛産 稚建皇子 影皇女

吾田媛は、稚建皇子と、影皇女を産んだ……。

皇子は、息長皇后の子の**はず**であった。吾田媛という名の母や、影皇女という名の妹は、姿を見たこともなく、その名を聞いたこともない。

白髪の女の言うことを信ずれば、稚建皇子は息長皇后の子ではない。もしそうだとすれば、皇子が日頃感じていた後ろめたさが、消える。

皇子の陽物は、春日郎女のふぐり玉への**苛み**によって屹立する。もうひとつ、やわらかな皇子の陽物を固くさせるもの……、それは、他ならぬ息長皇后であった。

その日、春日郎女の勧めに従い、息長皇女は比叡の滝に御幸した。群臣が水辺に跪くなか、皇后は薄い絹の単衣をまとい、水に足を浸し、滝壺にむかって豊かな四肢を沈めた。

冷たい水で裸ぎして身を浄め、しかる後に国見の歌を口ずさむ。

霞立つ 長き春日の

淡海の ほとりの山の

草枕 結びつ行けば
山高み おちたぎつ滝の
見れど飽かぬかも
見れど飽かぬかも

謡い終るとともに、随行した兵どもが弓弦を鳴らし、宮女どもが声を和して呪言を唱える。国津神を呼び出し、大王家への服属を促す。この地を讃える大王の歌の威光により、国津神は大王家への忠誠を誓う。

皇后は踵を返し、岸に向かってゆつくりと歩みはじめた。水が絹の単衣を濡らし、白いなめらかな肌や豊かに盛り上がった乳房を透かし見せた。面をつけた安曇の者どもが水に飛び込み、皇后の背に拝礼し、その弥栄を祈る歌を唱し、国津神が大王家に服属した証とする。

群臣が手を鳴らし、皇后を迎える。宮女たちが駆け寄り、濡れた単衣を脱がせ、真新しい服を手早く着せる。

母と快をともにしたい……。

この儀式の最中、稚建皇子の陽物は、固く膨らんでいた。

皇后が実の母でなければ、皇子にとって、肉欲の対象となる。その美しい貌、豊かな棟

乳、しなやかな腹、長く伸びた脚。ふくよかに実った四肢は、幼い硬さを遺した大伴郎女の軀とは違った、別の欲望を、皇子の内奥に目覚めさせた。

だがその欲望は、あの滝で出会った白髪の女の文字によって芽生えたのか。本来あった欲望が、禁忌によって押さえつけられていたのを、かの文字が解き放ったのか。

皇子は、春日郎女が足音を忍ばせ、この寝屋に訪れるのを待った。彼女は、別の寝屋で、姉妹どもとともに臥せているはずだった。大王家の寝屋に訪れることは許されない。来るはずのない郎女を、胸を灯火でじわじわと焼かれるような心地で、皇子は待った。

いらつめ……。

水に落ちた童が母の名を呼ぶように、ついに声に出して、しかし、か細く皇子は呻いた。

春日郎女は、来なかった。

翌日、皇后は宮処人を連れ、淡海を離れ難波への帰還の途に出た。

三日の後、王宮に戻るまでの間、皇子が春日郎女と言葉を交わしたのは、一度きりだった。

どこで言葉を交わしたか、皇子は覚えていない。郎女はこう、耳元で囁いた。

「比叡の滝のこと、決して口にしてはならぬ」
皇子は郎女の眼を見た。その眼は、厚く張った冬の池の水のように、皇子の問いを拒絶していた。

郎女は嘘をついている。
皇后も嘘をついている。

では、かの比叡の滝の白髪の女は？

影皇女とは、吾田媛とは何者か。

誰に問えばいい。稗田の史人が、まことのことを応えるとは思えなかった。まして皇后に問えるはずもない。皇子には、親しく交わる豪族もない。

皇子は、自らの心を打ち明ける相手が、誰もいないことに気づいた。

淡海より王宮に帰ってより皇子はひたすら自らに問い、答えを求め、その都度、暗い沼にはまりこみ、沈んでゆくような心地に襲われた。

比叡の滝でのこと、決して口にしてはならぬ……。

春日郎女の氷のような貌が臉の裏に浮かんだ。馬を走らせ、郎女の寢屋に忍んでゆく気にはなれなかった。

比叡の滝で見た、息長皇后の、水に濡れて衣が肌に張り付いた裸身の残像が、皇子の陽物を固くした。

皇子は、救いを求めるように、熱く滾る自らの肉を、まさぐった。

「皇子よ」

眼をあげると、春日郎女の悲しげな眼差しが、闇のなかに光っていた。

軀を起こしたとき、皇子は、衣の前がはだけ、あらわになっていることに気づいた。床に敷いた筵が、尻の下で水を含んで冷たかった。

「何故に、寢屋に来よと吾に命じぬ」

春日郎女は、皇子の傍らに膝をつき、その頬に掌てのひらをあてた。

温かい……。

皇子は、郎女の掌の暖かさに、かえって後ずさりした。

郎女が貌を寄せてきた。息づかいが、皇子の耳に伝わってきた。

「皇子よ」

郎女は、不意に頬にあてた掌の指を、皇子の頬に強く食い込ませた。その痛みに、皇子は身を固くした。

「皇子は、常に語らない。吾ひとり、語る」

郎女は、苛立ったように息を呑んだ。

「皇子は、常に何もしない。吾ひとり……」

郎女は、さらに強く皇子の頬をつかんだ。爪が頬の皮を破り、血をにじませた。

「吾ひとり……」

郎女の言葉が乱れた。ついで、郎女の鼻が悲しげに啜られ、肩が大きく揺れた。皇子の頬から手を離し、両手で貌を覆った。

郎女が泣いている……。

皇子は、身じろぎもせず、嗚咽する郎女を見つめた。

何故に郎女は泣く。

皇子はそつと頬を撫でた。痛みは消えていたが、傷口から流れた血が、顎から首筋にかけて、温かく滴したたっていた。

郎女が嗚咽をあげる間、皇子がしたことは、頬から流れ出た血が、襟を濡らしていることを確かめただけだった。

不意に、郎女が貌をあげた。

「皇子よ」

言うなり、両手で皇子の肩をつかみ、床に押し倒した。

「史人ふひとは言う。皇子は先の大王の御子」

郎女の膝が、皇子の股間を打った。皇子は呻き、身を強張らせた。

「皇子はやがて大王の御位みゐに即く」

郎女は、皇子のふぐり玉を、膝で圧迫した。皇子は涙を流し、身をよじらせた。

「このヤマトの地は、皇子のもの。皇子は、この世を統べる日輪の女神の末裔」

郎女は、膝で皇子のふぐり玉を押し潰しつづ、皇子の頬に平手打ちを喰わせた。

「何故に、比叡の山の狂女ごときの言に惑う」

「吾は……」

凄まじい激痛のなかで、皇子ははじめて言葉を発した。

「知りたい……」

「何を知りたい」

郎女は、悶える皇子の耳たぶを噛んだ。郎女の口中から鼻孔に、血の匂いが広がった。

「吾田媛のことを知りたいか。影皇女がことをか」

郎女は、皇子の肩をつかんで揺すぶった。皇子の後頭部が何度も床に打ち付けられた。

「それとも息長皇后が、まことに皇子の母なるか否かを知りたいか」

「然り！」

叫ぶと同時に、郎女の軀が皇子から離れた。

皇子は、両手で股間を押さえ、床にうつぶせ、激しく痙攣した。

郎女は、床に尻をつき、両手で身を支え、荒い息を吐き出した。

常ならば、ふぐり玉を痛めつけければ、皇子の陽物は固くなるはずだった。だが、膝で、その形が変わるまで踏みつけても、皇子の陽物は柔らかなままだった。

郎女が、息長皇后の名を口にしたとき、はじめて皇子の陽物は、熱い血を含んでそそりたはじめた。

郎女の膝は、敏感に皇子の欲望のありかを感じ取っていた。

「皇子よ……」

春日郎女は硬く表情を強張らせ、肩で息をしつつ言った。

「皇子が、稗田の史人の国史を信じ、やがて大王の御位を継げば、ヤマトは安らかに治まる。豪族どもも、民びとも安寧に過ごせる。皇子が、皇后が稗田の史人に書かせた国史を疑えば、ヤマトは乱れる」

皇子は、床に這ったまま、息を殺して、ひたすら激痛に耐えていた。

「それでもなお、知りたいか……」

郎女の息が、しだいに整っていった。それとともに、彼女の濡れた瞳が暗い光を放ち始めた。

「然り……」

皇子は、苦しげな息の下から、ようやくそう答えた。

郎女の唇に、冷たく歪んだ笑みが浮かんだ。

「皇子よ」

郎女は、裾を払って右の膝を立て、座った。

「影皇女に、会わせよう」

軀からだの内の臓腑が飛び出しそうなまでに、股間の激痛が皇子の全身を、破裂させんばか

りに渦巻いていた。

その痛みの渦のなかに、春日郎女の言葉が、針を打ち込まれたように、皇子の脳裏に突き刺さった。

「かげのひめみこ……」

皇子は、半身を起こした。

郎女は、立て膝の姿勢のまま、暗い虚空を見つめていた。

「吾田媛がこの世に在るや在らぬや、吾は知らない。影皇女が何者なるかを吾は知らない。

吾が知るはただ……」

郎女は立ち上がり、皇子に歩み寄り、見下ろしつつ固い口調で続けた。

「影皇女と呼ばれる女が、吾らが大伴の邸に在る」

「皇子よ」

春日郎女は、凝然と彼女を見上げる稚建皇子から眼を逸らした。

「吾は言った。皇子が、影皇女のことを知れば、ヤマトは乱れると。豪族や民の安寧は揺らぎ、多くの血が流れると。それでも皇子は知りたいと言った」

寢屋に差し込む月あかりが、郎女の白い頬を、冷え冷えと照らした。

「それ故に、影皇女に、会わせる」

郎女は膝をつき、皇子の肩を強くつかんだ。

「このこと、誰にも告げるべからず」

やっと闇に慣れた皇子の眼に、春日郎女の眼差しが、痛いほどに突き刺さった。皇子は眼を逸らした。

郎女は、さきほど彼女が立てた歯形で血の滲む皇子の耳をつかんで、貌をこちらに向けさせ、錐きりで揉み込むように繰り返した。

「このこと、誰にも告げるべからず」

皇子は、深くうなずいた。

春日郎女は、じつと皇子を見つめた。そして、震える声で言った。

「吾は……、会わせたくない」

郎女は、皇子の首の両手を回し、身を寄せた。皇子の頬に、己が頬を擦り寄せた。

頬に、涙がったわっていた。

皇子は身じろぎもせず、郎女が軀を振るわせ、嗚咽するに任せていた。

やがて春日郎女は、両膝を折って、額を床について拝礼し、去った。

稚建皇子の寢屋の裏庭から、寝ずの番の兵士どもの眼をかすめ、王宮を囲む柵まで、春日郎女は足音を忍ばせて走った。

かつて、皇子と郎女が、男童をのわらべめのわらべとして無心に遊んでいるときに見つけた、抜け道だった。

篝火かがりびを避けるように柵に身を寄せ、拳の裏で叩く。柵を乗り越えて一人の壮丁が降り立ち、郎女の身体を持ち上げて柵の向こう側に押した。

柵の外には、輿を用意した壮丁たちが控えていた。

郎女は、壮丁たちが担ぐ輿に載った。その貌には涙の跡もすで見えず、ヤマト随一の威勢を誇る大伴の家の娘としての厳かさおごそを保っていた。

四人の男たちは輿を持ち上げ、足早に去った。

住吉すみやしにある大伴金村の邸は、弘暎ふつぎようの青い闇のなかに黒々と静まり返っていた。

春日郎女を乗せた輿が、その門前に着き、輿を地面におろし、壮丁の一人が扉を叩いた。扉は重い音を立てて小さく開き、腰を降りた春日郎女はすばやく扉の内に走り入った。

邸のいちばん奥に大伴金村の寢屋があった。

春日郎女が、その寢屋に入ったとき、金村はすでに身づくろいし、褥しとねを隅に押しやって座っていた。

「吾が娘よ」

床に額づく郎女に、金村は優しげに声をかけた。

「如何であった」

郎女は貌をあげた。いたわりの言葉もなく、使いより帰った下部に訊ねるような父の口

調に抗うがごとく、唇を歪め、言葉を吐き出した。

「吾は言った。皇子が影皇女のことを知れば、ヤマトは乱れると。諸臣や民の安寧は失われ、多くの血が流れると。それでも影皇女のことを知りたいか、と。父が教えたが如く、そう問うた。皇子は答えた」

郎女の眼から涙があふれ出た。細かく震える娘のか細い肩に、微笑していた金村は、唇を引き締めた。

「然り……と」

ふたたびうなだれた郎女に、金村はゆつくりと歩み寄り、肩を抱いた。

「吾が娘よ」

郎女は、父が見えぬように貌をそつとあげた。もはや涙は流れておらず、不機嫌げに眉がゆがんでいた。

「よう仕得たり」

それから、郎女の頬に掌をやり、そつとこちらに向かせ、微笑をつくった。

「大伴の榮えは、汝とともにある。汝は、やがて大王の皇后となる。父が言うがとおりにすれば、定めてそうなる」

郎女は眼を臥せ、小さくうなずいた。

「休め」

郎女は立ち上がり、後ずさりし、額を床につけ、去った。

「影皇女……吾田媛……」

大伴金村は、大きく息をつき、唇の端をわずかに歪めた。

「稗田阿礼よ。いまだこの世に在ったか……」